

ガンダーラにおける半跏思惟像の発生と展開

マクロースキー 芽衣子

人間社会環境研究科 博士後期課程 2年

はじめに

報告者は博士論文の研究テーマとして、「ガンダーラにおける半跏思惟像の発生と展開」を挙げている。このテーマを扱うにあたり、国内の主要な所蔵品を精査するだけでは資料としては不足であると思われたため、今回「文化資源学フィールドマネジャー養成プログラム」を通じて、海外、主にイギリスの博物館・美術館に所蔵されている作品を調査することにした。

1. 派遣先・調査日程・訪問先

派遣先：イギリス

調査日程：2011年1月17日～2月22日（37日間）

訪問先：大英博物館・ヴィクトリア&アルバート美術館・アシュモレアン美術館・ナショナル・ミュージアム・東京国立博物館・メトロポリタン美術館（アメリカ合衆国）

※メトロポリタン美術館にはこの派遣期間中に私費で赴き、その調査内容も今回の報告に大きく寄与するものであることからここに加えるものとする。

2. 調査目的

2.1. 当該地域の地理的・歴史的特性

今回の調査報告をするにあたり、まずは対象地域であるガンダーラ地域について簡単に概括することにする。

ガンダーラの仏教美術が展開を見せたのは、ペシャワール周辺域を中心とした狭義のガンダーラ地域である。そこは、東にはアンペーラ峠からインダス河、北にはモラ・シャーコート・マラカンドなどの峠、西に

はバジャウルにいたるナワ峠やカイバル峠が周囲を取り巻き、東西約100km、南北約70kmの三方を山に囲まれた三角形の盆地が形成されている。ペシャワール周辺域のみならず、広義のガンダーラ仏教美術は、東にはタキシラ地方、北にはスワート河の流域、西はアフガニスタン・ヒンドゥークシュ山脈の南麓地帯にいたる。その中でも、スワートはアショーカ王によるブトカラ大塔が創建され、5世紀にこの地を訪れた法顕によると、当時スワートには500もの僧伽藍があったと記している。このように、スワートは仏教美術が早くから根付いていた地であり、イスラム教が入ってくる8-9世紀頃まで、仏教美術の一大センターとして機能していた。宮治昭氏は、この広義および狭義のガンダーラ地方について、「インドと中央アジアの「狭間」の地域である。「狭間」ゆえに、古くからインド、イラン、そして中央アジアの諸民族の争奪の舞台となり、それがこの地へ諸方面からの文化流入の機会を与えたといえる」¹と述べている。

このガンダーラ地域がいかなる歴史の変遷を経たのかについての詳細は割愛するが、アレクサンドロスの東方遠征、マウリヤ朝による交易拠点としての発展、紀元前2世紀から紀元後1世紀にわたるギリシャ文化を基調とするイラン系民族の流入、イラン系文化と土着のインド文化およびギリシャ系文化の融合を推進したクシャン朝の興隆など、この地域は非常に文化的に多面性を持って展開してきた。ガンダーラの文化はガンダーラに元々いた人々の文化、イラン系民族がもたらした文化、ギリシャ・ローマ人の文化という3つの固有の文化が複雑に絡み合い成立しているといえるだろう。さらに、この地で発展したいわゆるギリシャ系美術は、インド・ギリクスのヘレニズム美術、クシャン族のグレコ・イラン美術、ローマ由来のグレコ・ロ

¹宮治昭『ガンダーラ 仏の不思議』講談社 1996, p.17.

一マ美術の3つの要素を含んでいるのである。

2.2. 研究史および問題点

以上のガンダーラの地域的・歴史的特性をふまえ、対象とする半跏思惟像の研究史を簡単に見ていく。

国内において、半跏思惟像に関する研究の先駆けとして知られるのは高田修の「ガンダーラの半跏思惟像」(『美術研究』235, 1965, pp.30-74.)である。これ以降、1968年には水野清一氏が中国の半跏思惟像に関する研究を、1981年に田村圓澄氏が新羅の半跏思惟像に関する研究を次々と発表している。また、1980年代は海外においても中国・韓国・日本の半跏思惟像がさかんに研究され、数本の論文や研究書が出されている。1990年代になると、宮治昭氏の「ガンダーラの半跏思惟の図像」(『涅槃と弥勒の図像学 - インドから中央アジアへ -』吉川弘文館, 1992, pp.321-353.)をはじめとして、J. Lee や A. M. Quagliotti がガンダーラの半跏思惟像に関して総括的な研究を進めている。さらに2000年代には、大西修也氏や E. H-L. Hsu, C. B-Picronらにより百済や中国の半跏思惟像の研究が進んでいる。

しかし、通覧してみると、半跏思惟像の研究は主として中国・韓国・日本に主眼がおかれており、ガンダーラの半跏思惟像の研究は総じて少ない。確かに、ガンダーラにおいて半跏思惟像は先に挙げた国に比べて作例も少なく、制作された期間もわずかである。しかし、大乘仏教の枠組みのなかでは、スワートをはじめとする西北インドを通り、東方への伝播を果たすだけの重要性を持っていたということは確かである。その重要性は看過することはできず、さらに東アジア地域において、弥勒信仰と結びついたあらたな図像の生成を促した源流であるという点では、ガンダーラの半跏思惟像はさらに研究されてしかるべき分野であろう。

既存のガンダーラの半跏思惟像研究は、ほぼ一貫してガンダーラ地域に限定され、後の東方への伝播について触れているだけである。しかし、ガンダーラ美術は上述のように、アレクサンドロス大王の東方遠征などにより伝えられたヘレニズム文化の影響を多分に受けている。宮治氏が指摘しているように半跏思惟像の出現がガンダーラであったとしても、いきなりその地域に出現したとは到底考えられず、その源はいずれかに存在したと考えるのが妥当ではないだろうか。その点に関しては、A. M. Quagliotti が1989年に発表した論文(A. M. Quagliotti, "Mahakarunika (Part I)", *Annali*

Istituto Universitario Orientale, Napoli, vol. 49, Frascicolo 4, 1989, pp. 337-70, pls. I-XII.) 中で指摘しているが、現在までにどの程度まであきらかになっているかは不明である。

以上のことから、今回の調査目的はガンダーラで仏教美術が開花する以前の西ヨーロッパ世界の美術品を起点とし、その流れを追うことでいかにガンダーラにおける半跏思惟像が成立し、展開していったかについての手がかりを求めるものである。上述した各博物館および美術館は仏教美術のみならず、古今東西の美術品を数多く所蔵しているため、この流れを追う作業を行うにあたり地域や時代にとらわれることなく俯瞰的に調査できるという点において非常に適していると思われる。

3. 調査内容および成果

ガンダーラの半跏思惟像の発生と展開を求め所蔵品を精査するにあたり、以下の点に着目することにした。すなわち、「手の位置」である。図1はガンダーラにおける半跏思惟像の典型であるが、その特徴を挙げる

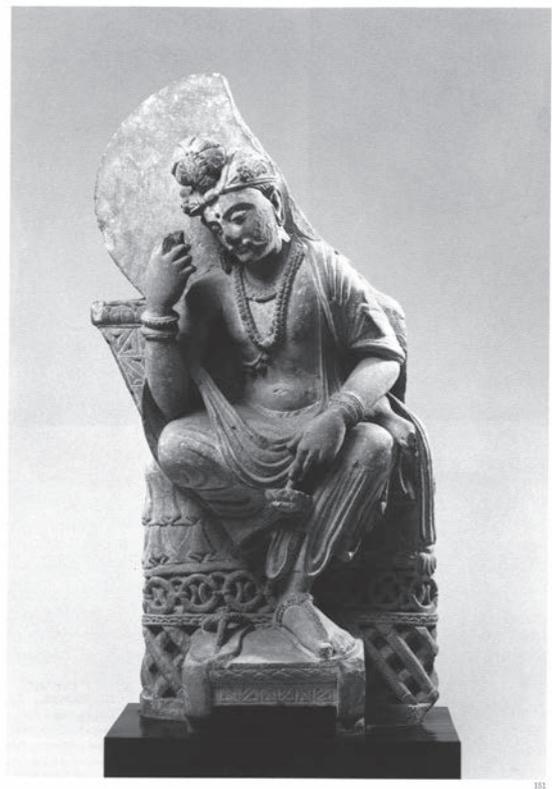


図1 菩薩半跏像 片岩・高さ67.3cm 松岡美術館

と以下ようになる。左足を垂下して脚台にのせ、右足は左膝上に組み、右手の肘を右膝について思惟のポーズを示し、左手は膝前におろして未敷蓮華の茎を握る。頭にはターバン冠飾を被り、装身具を付ける。この特徴は仏伝図中の悉達太子像および魔王像や大神変図中の菩薩像、仏三尊像中の脇侍菩薩像、単独で成立する半跏思惟像などにより多少の違いは生じるものの、この要素を含むものが多い。

ここでいう「思惟のポーズ」とは、膝についた右手は軽く握り、第二指を伸ばし、上体および頭部をやや斜め右に傾け、半眼で面を伏せるポーズのことである。この「頬杖」をついているような独特なポーズこそが半跏思惟像の大きな特徴の一つであるといえるだろう。この「手を頭部付近へ近づける」という点に着目し、「両手ないし片手を頭部付近へ近づける・頭を抱える」という、より動きに範囲を持たせ、その上で所蔵品を通覧していくこととした。

3.1. エジプト (新王国時代 ~)

西洋美術部門の多くはエジプトから始まる美術館・博物館が多い。そこから順番に時代を追ってみたのだが、この「両手ないし片手を頭部付近へ近づける・頭を抱える」ポーズが非常に多く見られることが分かった。例えば図2の「死者の書」の一部には、死んでミイラの処理をされるオシリス神の前で頭を抱えて座り込む二人の女性が描かれる。

また、図3および図4でも図1と同様に頭部付近に両手ないし片手を近づけ、嘆く女性を表す。このよ



図2 死者の書(抜粋)

うな図像表現は大英博物館のみならず、メトロポリタン美術館に収蔵されている多くのエジプトの葬送の場面を表した美術品にも見られた。その数はあまりに膨大で、このようにパピルスに描かれたものは少ないが、石棺・木棺・甕棺、レリーフなど多岐にわたり、すべてを把握するのは至難の業であった。

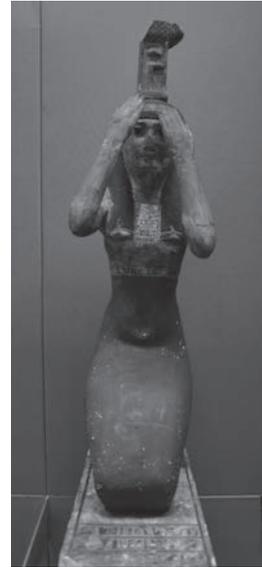


図3 Figures of Isis and Nephthys as mourners
紀元前1千年後期頃 大英博物館

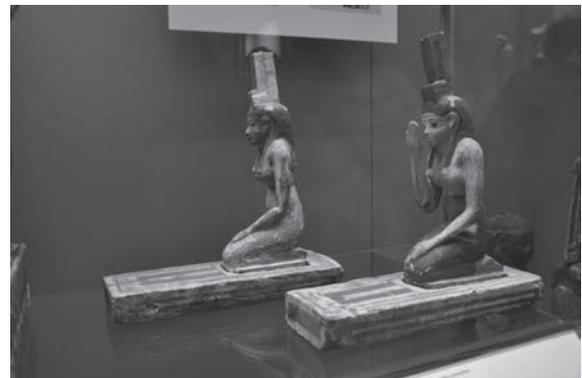


図4 BC 305-310 プトレマイオス朝 出土地不明
大英博物館

3.2. 古代ギリシャ

古代ギリシャにおいても同様の傾向が見られる。すなわち、「両手ないし片手を頭部付近へ近づける・頭を抱える」ポーズは葬送の場面やそれに類する場面(死者を悼む場面)に多く描かれていることが分かる。

以上を見ていくと、これらのシーンに見られる「両手ないし片手を頭部付近へ近づける・頭を抱える」ポーズは、主として「嘆き mourning」を示したポーズ

であり、ガンダーラの半跏思惟像に見られるような「頬杖をついたようなポーズ」で「思いに耽る」ものではないと考えられる。図9など多くの「涅槃」の場面でも表されているように、これらの「嘆き」のポーズは形を変えることなくガンダーラへと伝播し、定着していったものと考えられる。



図5 In the funeral procession (*ekphora*) a cart bears the dead to the tomb BC 520 アテネ出土 パリ



図6 Terracotta figure of a mourning woman BC 650 カミラス(ロードス)出土 大英博物館



図7 Oinochoe (wine jug) with a repeated scene showing the dead laid out on a bier (*prothesis*) attended by mourning figures BC 700 ca. ギリシャ出土 大英博物館



図8 Terracotta funerary plaque ca. BC 520-510 ギリシャ出土 メトロポリタン美術館

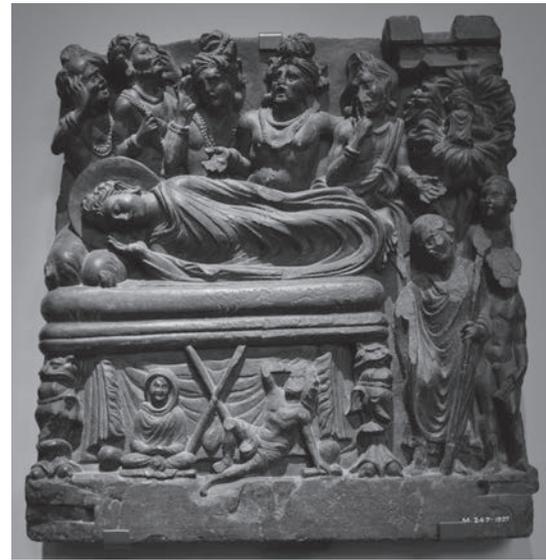


図9 The death of the Buddha AD 100-300 ロリヤン・タンガイ出土 V&A 美術館

3.3. 「頬杖」の図像の出現

それでは一体いつ頃から半跏思惟像のような、いわゆる「頬杖」をつく図像が出現するのだろうか。この点に関して成田英明氏は紀元前470年頃のアッティカ様式の容器に描かれた「スピュクスの謎を考えるオイディプス」にその兆候が見られると述べている²。この図像は現在ヴァチカン美術館に所蔵されているようで報告者は未確認なのだが、成田氏によると描かれているオイディプスは旅人を表す鍔広の帽子・外套・ブーツを身につけ、左脚を上にして脚を組み、左腕で頬杖をつく。この図像はまさに「思惟」するオイディプスの内面を表現したものであると同氏は述べる。さらに、このオイディプスの図像は図10のような「ペネロペ

² 成田英明 1994「メランコリーの系譜(III)」『東京芸術大学音楽学部年誌』20, 77-113.



図10 Terracotta plaque ca. BC 450 ギリシャ出土 メトロポリタン美術館

とオデュッセウスの再会³の場面へと昇華され、古代ギリシャの「頬杖」の図像の典型となったと考えられる。

ここで特筆すべきなのは、この時代(紀元前5世紀頃)の図像表現の特徴である。それ以前の時代の特徴としては、怪物や冒険が題材とされ、一つの場面に複数の場面が描かれたり、挿話からの抜粋などが挙げられる。しかし、紀元前5世紀になると、より静的な心理的次元をもった場面に焦点を当て、人物間の相互作用を描くようになる。この「ペネロペ」の図像はまさにその時期に制作されたものであり、この図像は「頬杖」をつくという図像的特徴の中に心的情景を多分に含むもので、ポーズと人物の心理に深い関係性が見られるものである。

ここにおいて、「頬杖」の図像と「嘆き」の図像はその性格を異にし、制作者はその意図を明確にもって描き分けていったと考えられる。

これをふまえ、明らかに「頬杖」ないしはそれに非常に近い図像を追いかけてみると、面白いことに図11~図14に示すように、その多くは墓碑・墓石(grave marker / funeral monument / funerary relief)に見られるのである。

これらの墓碑・墓石が明確に何を示しているのかについては未だ精密な考察ができていないが、少なくとも自身ないしは他人の死を悼み、それを深く考え、死とは何か、ひいては生とは何かということを思惟している姿ではないかと考えている。それはただひたすらに死を悼む「嘆き」だけではなく、深い心理と知性と

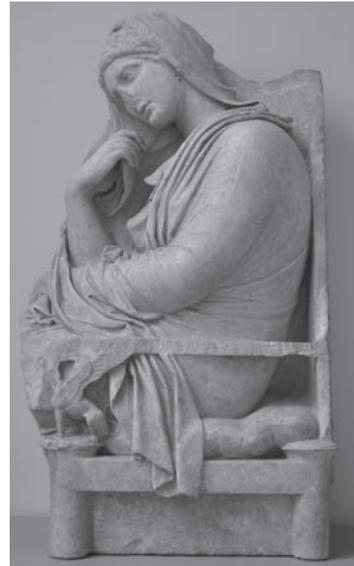


図11 Marble stele (grave marker) of a woman ギリシャ出土 BC 4c 半ば メトロポリタン美術館



図12 Fragment of a marble stele (grave marker) ギリシャ出土 ca. 400-375 BC メトロポリタン美術館

が要素として加わっていると考えられるため、この墓碑・墓石に見られる「頬杖」のポーズはガンダーラでしばしば制作された半跏思惟像の源流と考えられるのではないだろうか。

³ 右：老人姿のオデュッセウス 中央：ペネロペ 左上：息子テレマコスと老いた父ラエルテス 左下：豚飼いエウマイオスであるとされる。



図 13 Limestone funerary relief タレントウム出土 ca.325-300 BC メトロポリタン美術館



図 14 Limestone grave marker キュプロス出土 4世紀 メトロポリタン美術館

4. 考察と展望

今回の調査を通じて得られた考察は以下のようなものである。

- ① ガンダーラに見られる半跏思惟像の源流は古代ギリシャ・ローマに求めることが可能である。
- ② そのポーズは「嘆き」と「頬杖」の二要素に大別

することができるが、「嘆き」のポーズはその形を変えることなくガンダーラにそのままたらされる。

- ③ それに対し、いわゆる「頬杖」のポーズは「嘆き」の要素を抱きつつも、「思惟」という心理的側面を強く持つものである。
- ④ さらに、その多くが死と深い関わりを持ち、その「嘆き」と「思惟」において「此岸」と「彼岸」とをつなぐ役割を有するのではないかと。

特に、④に関して、仏伝「樹下観耕」にしばしば題材を求め多くの半跏思惟像が制作されていることを考慮すると、この両義性・境界性ともいべき性質は、ガンダーラに伝播した際に注目され、このエピソードを表すのに適した手法として採用された可能性が高いのではないだろうか。さらに、今回は言及しなかったが、「ペネロペ」の図像が成立したほぼ同時期に発展していったメランコリー／メランコリアイという概念もそこに介入していった可能性が考えられる。アリストテレスは『問題集』30：1の中で「深い知性と深い理解力をそなえた人々はメランコリーに陥りやすい。というのは、彼らは精神の運動が迅速で、多大な予見力と想像力に恵まれているからである。」と述べている⁴。そして、このメランコリーは「英雄病」とも言われている。このような図像的手法とメランコリーという概念が結びつき、ガンダーラで制作された半跏思惟像は成立の過程を辿っていったのではないだろうか。

今回の「文化資源学フィールドマネージャー養成プログラム」を通じて、図像資料を多く揃えることができ、半跏思惟像成立にいたるまでの過程の一端を垣間見ることができたように思う。しかしながら、未だに精査すべき問題点は多々残っている。墓碑・墓石研究が現在どのような展開を見せているのか、いつ頃メランコリーと「頬杖」の図像は結びつくのか、左脚を右脚の上に乗せるポーズはどこからやってきたのか、などである。半跏思惟像はいまだに謎の多い作品である。今回は西洋世界からの視点を以て挑戦した試みであったが、今後はインド内部における半跏思惟像に関しても詳しく見ていく必要があると思われる。

⁴ R. クリバンスキー・E. パノフスキー・F. ザクスル 1991『土星とメランコリー：自然哲学・宗教・芸術の歴史における研究』田中英道監訳・榎本武文他訳、晶文社、1991.

〔謝辞〕

最後になりましたが、今回の調査を行うにあたり森雅秀先生に数多くのご教示とご指導を賜りました。また、現地イギリスでは大英博物館キュレーター、Dr. Michael WILLIS 氏にご多忙中にもかかわらず大変お世話になりました。この場を借りて御礼申し上げます。

参考文献

- 『ガンダーラ美術とバーミヤン遺跡展』 宮治昭監修・編集，2007-2008.
- 岩崎宗治 1984「<考える人>のイメージ－歴史的素描－」『言語』 vol.13, 20
- 木原志乃 2006「古代ギリシアにおけるメランコリア－ヒッポクラテス派からペリパトス派への医学史的展開－」107(12), 1-14.
- 栗田功編著 2003『ガンダーラ美術 I・II』（改訂増補版） 二玄社.
- 高田 修 1965「ガンダーラの半跏思惟像」『美術研究』 235, 30-74.
- 同 1979「ガンダーラ美術における大乘的微証－弥勒像と観音像－」『佛教芸術』 125, 11-30.
- 田中 純 2004「我ら、土星の子供たち－メランコリーの形式－」『ユリイカ』 492(36), 95-102.
- 同 2006「弥勒とメランコリー」『UP』 407, 63-67.
- 田辺勝美 2011「アフガニスタン北部、オクサス流派の石灰岩製彫刻の研究－近年我が国に請来された作品の紹介と2、3の図像学的問題を中心に－」『中央ユーラシアの文化と社会』中央大学出版部.
- 田村圓澄・黄寿永編 1985『半跏思惟像の研究』吉川弘文館.
- 成田英明 1985「メランコリーの系譜」『東京芸術大学音楽学部年誌』 11, 83-113.
- 同 1994「メランコリーの系 III」『東京芸術大学音楽学部年誌』 20, 77-113.
- 同 1996「メランコリーの系譜 IV）－弥勒菩薩と英文学－」 22, 49-80.
- 水野清一 1968「半跏思惟像について」『中国の仏教美術』平凡社，233-250.
- 宮治 昭 1992「ガンダーラの半跏思惟の図像－半跏思惟像の出現と観音菩薩との結びつき－」『涅槃と弥勒の図像学』吉川弘文館，321-353.
- 同 2005「半跏思惟像の生成－イメージ・テキスト・宗教実践－」『宗教美術におけるイメージとテキスト』『総合テキスト科学の構築』第5回国際研究集会報告書，131-141.
- 同 2006「講演ガンダーラ・マトゥラーの美術と大乘仏教の関わり」『印度哲学仏教学』 21, 349-372.
- 同 1996『ガンダーラ 仏の不思議』講談社選書メチエ.

- R. クリバンスキー・E. パノフスキー・F. ザクスル 1991『土星とメランコリー：自然哲学・宗教・芸術の歴史における研究』田中英道監訳・榎本武文他訳，晶文社，1991.